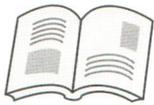


陽差しに春を感じるようになり、2006年度も残りわずかとなりました。
甲南大学人間科学研究所では今年度
「育てることの困難」と「戦後効率主義の帰結」
の2つのテーマに沿って研究活動を進めてきました。
研究の成果は2冊の論文集として結実します。
ニュースレター第11号では、その内容をみなさまにご紹介します。





現代は、育てることの難しい時代です。もちろん、「子育て」ということに限って言えば、いつの時代にも、どんな社会においても、それ相応の困難はあったでしょう。しかしながら、昨今のわが国の状況を見ていると、どうも「育てる」という営み全体がうまくいかなくなっているように思われます。

たとえば、若い人がなかなか結婚せず子どもを産まないという傾向が、国家的な将来の危機につながる社会問題であるとして、あちこちで盛んに議論されています。それだけでなく、せっかく子どもが生まれても、親が虐待して、ときに死に至らしめるような悲惨な事件が後を絶ちません。さすがに近年では、「母親の未熟」「母性の喪失」といった単純な言説で今日の育てることの困難な状況を説明しようとする風潮は影を潜めてきました。個々の母親の問題として片付けるわけにはいかない、もっと構造的で根の深い問題が底に横たわっていることに、ようやく人々は気づきはじめたのです。

成人期を迎えても心理的には「永遠の思春期」を生き続け、親の庇護のもとに生活し続ける「社会的ひきこもり」の人々も増えています。親の家を「さなぎ」の殻にしてひきこもった思春期の子どもたちは、時が満ちて蝶になり巣立つということが難しく、ずっとさなぎのままに続けてしまいます。誕生から巣立ちまで、もっとトータルに見渡す視点をもたない限り、育てることをめぐる今日の状況を変えていけるような処方箋も見えてこないのではないのでしょうか。

また、今日の「育て-育てられる関係」の亀裂は、「親から子へ」という家族内の問題としてだけでなく、「年長者から若者へ」という、組織や社会における世代の引き継ぎの問題としても表れています。2000年頃から世間の注目を集めた、いわゆるITベンチャー起業家第二世代の主だった何人かが、2006年には相次いで違法取引で逮捕された事件は記憶に新しいところです。この一連の騒動における、年長者の若者に対する反応は、困惑と拒否感に非常に彩られたものでありました。戦後のわが国を牽引してきた中高年世代は、自分たちが懸命に生きるなかで、次世代に何か大切なものを引き継ぐことに失敗したという集合的な事実、直面させられたのです。

現代がこれほど「育てること」の難しい時代になった要因は、さまざまな次元と領域から探ってみることが可能でしょう。妊娠・出産における科学技術の発展と、医療による母子の絆の分断。戦後の高度経済成長時代がもたらした、核家族における父親不在と母子密着の子育て。個性を重視し、画一的なものさしによる評価を避けるという建前によって、子どもが思春期心性を脱却するしくみを失った教育制度の問題。情報化による、子どもの人格構造やコミュニケーションパターンの変化。社会を支える効率主義、成果主義の問題。地域社会の衰退と、子どもを育む安全な自然環境の破壊。そして、個々人の無意識の心理に深く根づいた、「母性神話」と呼ばれる慈母なる女性への期待と、個を生きようとする女性自身の葛藤などです。

しかし、何よりも私たちが困難を感じる要因には、どんな次世代を育てればよいのか、という方向性の喪失があるのではないのでしょうか。戦後、個人的な次元でも、社会的な次元でも、右肩上がりの成長を目標に生きてきた私たちは、育てる営みのなかにもこの直線的なモデルを取り込んできました。現代人にとって「育てる」とは、速く、効率よく、能力的に上へと導くことと同義です。しかしながら、本来、人を育てるといふ営みの先には、「育てられる者」が「育てる者」に実存的変容を遂げていくという、循環あるいは世代継承が想定されていなければならないのではないのでしょうか。さなぎが蝶になるような、死と再生の契機が用意されていなければならないのではないのでしょうか。

本書は、以上のような視点に立ち、「育てること」を、乳幼児期の子育てに限らず、子どもが巣立つまでの親と子の営み、ないし世代の引き継ぎという意味で広く捉え、わが国で生じている今日的な困難を学際的に分析することを目的として編まれました。

甲南大学人間科学研究所叢書
＜心の危機と臨床の知＞8

育てることの困難

2007年2月人文書院より刊行



編者：高石 恭子(甲南大学文学部・学生相談室／臨床心理学・学生相談)

結婚出産経験の多様化と子育て期の働き方 —求められる子育ての可視化—	中里 英樹
わが国における公共性の実現と 男性の育児参加問題	汐見 稔幸
子を人として尊んで育てる	武田 信子
教育現場に見る「育てる」ことの困難	古屋 敬子
子育て世代を支える言葉 —「子育ては難しい」という意識の発生をめぐって—	穂苅 千恵
「若者」を育てることの困難	斎藤 環
内向きの若者たちへ —産み育てる人になることの困難—	内藤あかね
現代女性の母性観と子育て意識の二重性	高石 恭子

甲南大学人間科学研究所 第7回公開シンポジウム
育てることの困難—家族・教育・仕事の今を考える
パネルディスカッション

甲南大学人間科学研究所叢書

<心の危機と臨床の知>9

「いま」を読む

——消費至上主義の帰趨

2007年2月人文書院より刊行



編者：川田 都樹子（甲南大学文学部／美学・芸術学）

第一部：見すえる

- 消費とカタストロフィ ----- 飯島 洋一
市場競争原理と臨床心理学 ----- 大森与利子
タナトスの股肱
——現代日本における超自我のはたらきについて ----- 西 欣也

第二部：生きる

- アーティスト・イン・レジデンスが示すもの
——資本中心主義とアート ----- 笹岡 敬
青年支援のベースステーション
——「自己／他者」「決定」「責任」をキーワードに ----- 田中 俊英
統合失調症の人のささやかな消費 ----- 山口 直彦
応用芸術学としての美術企画
——「岐阜おおがきビエンナーレ2006」を回顧して ----- 吉岡 洋

第三部：たどる

- 「ポップ」で「キッチュ」で「クール」なアート？
——消費文化とアートの一つのエピソードとして ----- 川田都樹子
ブランディング戦略とアイデンティティ
——グローバルゼーションが日本にもたらしたものの ----- 谷本 尚子
子どもの世話と生業・生活（いのちぎ）での
夫婦役割のステレオタイプとその交換
——戦前・戦後炭鉱労働者を例に ----- 羽下 大信
トラウマと「いま」——賠償と秘密の行方 ----- 森 茂起

本書は「現代人の心の危機」へのアプローチの方法として、その背景にある社会の姿を、特定の分野に限定することなく浮かび上がらせようとするものです。専門分野を異にする論者が、それぞれの切り口から「いま」という時を読み取り、未来への展望を自由に描きだしています。共通のキーワードとして「消費至上主義社会」を設定しました。現在の諸問題を、特に戦後日本の「消費社会」という切り口から考察しようというわけです。戦後日本は、過激なまでの経済成長主義の国家政策をとり続けてきました。それによって日本は敗戦の廃虚の中から立ち上がり、奇跡的な高度成長をなし遂げ、急速な生活水準の向上を果たして「経済大国」と呼ばれるまでになったのです。しかしその結果、都市問題、過疎問題、地球環境問題等々高度成長の諸矛盾が社会問題として顕在化してきました。また、日本を有数の富裕国へと押し上げた企業主義・効率主義は、あらゆる分野における価値観の基準を経済構造の中に見出すという悪癖をも定着させてしまいました。ここでは、何もかもが短期的な商品価値によって評価され、短期間に消費されてしまうのです。

さらに1980年代後半のバブル景気は、企業や富裕層のみならず、一般人まで巻き込んだ一大消費ブームを引き起こしました。ところが90年代初頭、バブル崩壊とともに景気は一気に後退しました。一般に「失われた10年」と称される平成不況の混乱です。そのただなかで起きたのが阪神・淡路大震災でした。私たちはそれまで築き上げてきた物質文明が一瞬にして脆くも崩れ去り、たちまちパニック状態に陥るのを目の当たりにしたのです。こうした大きな変動を経験し、経済社会機構への危機意識が高まったせいで、かえって消費をベースとしてあらゆる価値を測ろうとする傾向が増幅されているように感じます。そのさまはあたかも、欲望という名のブラック・ホールを中心に据えて、歪に膨張し続ける「消費宇宙」を形成していくかのようです。

今や私たちの日常生活は、欠如を満たすための単純な消費活動の域をはるかに超え、欲望の自由度がこのうえない高まりを見せるなかで、誰もが（程度の差こそあれ）「買い物依存症」的に「消費のための消費」を繰り返しているようにも思えます。モノ（商品）に囲まれて生きるうちに、自らが所有するモノだけが、「個性」表現の術になっていきます。しかしながら、消費マーケットが与えてくれるのは、画一性の中からあるものを選択するだけの「個性」でしかありません。「オリジナリティ」という神話さえも、こうして「モード」として消費されていくわけです。

本書は、主に心理臨床に携わる者と、芸術や美学に携わる者とは、それぞれ全く独自の視点から、自由に「いま」という地点を語った論考の集積です。各執筆者の語る「いま」は、大きく三つに分けられます。まず、「いま」まさに私たちが抱えている問題点を鋭く見すえて理論的に告発していくもの。次に、執筆者本人が「いま」の問題に実践的に向き合った事実を生きた言葉で綴っていくもの。最後に、「いま」の状況に至るまでの経緯を振り返り歴史的に検証したもの、の三つです。そこで、本書を三部構成とし、それぞれ、第一部「見すえる」、第二部「生きる」、第三部「たどる」としました。個々の論文は独立したものであり、それぞれの問題点をそれぞれの視点で書き起こしたもので、読者諸氏は、この三部編成に関わりなく、どの論文からお読みいただいても構いません。しかし、どこからお読みいただこうとも「消費至上主義の帰趨」としての「いま」という時点への痛切な批判が、重層低音として響きあっている様を感じ取っていただけることと思います。

● これまでの活動

研究会

第35回 心理療法における超越——超越の不可能性と現実

開催日: 2006年11月17日(金)
講師: 河合 俊雄 (京都大学/臨床心理学、ユング心理学)
企画: 横山 博

第36回 語りはじめた男たち——ホットライン・グループワーク

開催日: 2006年12月4日(月)
講師: 濱田 智崇 (甲南大学人間科学研究科、『男』悩みのホットライン/臨床心理学)
千葉 征慶 (メンズサポートルーム/臨床心理士、産業カウンセラー)
企画: 上村 くにこ

第37回 宗教における超越と内在——シャーマニズムにおける心身の変容・変身・変態の問題をめぐって

開催日: 2006年12月22日(金)
講師: 鎌田 東二 (京都造形芸術大学/宗教哲学、神道学)
企画: 横山 博

第38回 ギリシアが現在を語りだす
——暴力の起源・暴力のジェンダー

開催日: 2007年1月26日(金)
講師: 上村 くにこ (甲南大学/神話論、ジェンダー論)
饗庭 千代子 (甲南大学国際言語文化センター/フランス文学、ギリシア神話)
企画: 上村 くにこ

第39回 境界性人格障害の心理療法過程にみられる超越性

開催日: 2007年2月16日(金)
講師: 横山 博 (甲南大学/精神医学、ユング心理学)
企画: 横山 博

● これからの活動

公開シンポジウム

第8回 心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって(仮題)

開催日: 2007年7月22日(日) 13:00~17:30
場所: 甲南大学5号館511教室
シンポジスト: 河合 俊雄 (京都大学/臨床心理学、ユング心理学)
木村 敏 (河合文化教育研究所/精神医学)
上村 くにこ (甲南大学/神話論、ジェンダー論)
鎌田 東二 (京都造形芸術大学/宗教哲学、神道学)
指定討論: 垂谷 茂弘 (舞鶴工業高等専門学校/人間論、哲学)
横山 博 (甲南大学/精神医学、ユング心理学)
司会: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)
企画: 横山 博
※詳細が決まり次第、随時ホームページ等でお知らせします。

研究会

第40回 タイトル未定

開催日: 2007年4月20日(金)
講師: 名取 琢白 (京都文教大学/臨床心理学、ユング心理学)
企画: 横山 博

第41回 タイトル未定

開催日: 2007年5月18日(金)
講師: 木村 敏 (河合文化教育研究所/精神医学)
企画: 横山 博

その他の企画

第4回 心理臨床ワークショップ
加害少年への援助

開催日: 2007年3月4日(日)
講師: 藤岡 淳子 (大阪大学/非行臨床心理学)
定員: 30名(※申込は締め切りました)
企画: 森 茂起
共催: 甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
後援: 兵庫県臨床心理士会

発行年月日: 2007年2月26日



編集後記

1月に長野県へ行ってきました。この冬は雪不足。地元の方は「スキー場関係者に気の毒なので大きな声では言えないが」と前置きした上で「雪かきの必要もなくて楽」と口をそろえておられました。しかし地球規模で起きている気候の変化を見過ごす訳にはいきません。そしてこの変化の原因は現代人の営みであり、社会のさまざまな動きと結びついています。現代の諸問題を多角的に捉える当研究所の叢書を手に取っていただくこと。それも地球温暖化を食い止めるの第一歩、と言っては大ききでしょうか。